

## 《公開講演会記録》

## 安倍政権をとりまく人々と政治課題

TBS報道局政治部長 龍崎孝



本日はこのような伝統ある会にお招きいただきありがとうございます。この会は中国に造詣が深く、また満州ゆかりの方が多いと伺っております。母親が満



安倍首相

州で育ち、当時の新京におりました。祖父がそこで電気関係の会社を営んで、その後シベリアへ抑留もされましたが、こうした会にお呼びいただくのも何かの縁だと感じております。本日は安倍新政権の今後について占へ、ということでもかきり越した次第です。1時間半ほどのお時間となりますが、少しでも実のある話がお伝えできたらと思っております。

さて本日は次のような順番でお話を進めていきたいと考えております。初めに私が実際にお会いして感じた①安倍総理という方、その人物はどういうものなのか、そうした点についてお話し、2番目に②今回の人事に秘められたもの、3番目に③安倍政権の今後の政権運営の課題、④として参議院選挙も念頭に今後の野党各党との関係についてまとめてみたいと思っております。

## 変貌した安倍首相

さて安倍総理ですが、前回の政権の時は「お友達内閣」などと揶揄されながらああした結果になったことはご存じの通りだと思います。今回はどうかといえますと、前回の反省も踏まえながら相当周到に政権運営を進めている感じがします。むしろ前回できなかったことをやるには、従来の前例などもかなぐり捨てて進むという風にさえ見えます。選挙の前の印象は、かなり「高揚」したというか「上気」したというか、そんな感じが垣間見えまして、非常に細かいところまで気が付いて、ご自身で指摘してくる、そんなところがございました。

弊社のことで申し上げれば、朝の情報番組の中で、NHKのアナウンサーの方



石破幹事長

の痴漢事件について取り上げたことがありました。そのニュースの中で誤って安倍総裁が国会の本会議場で談笑しているVTRが2、3秒流れてしまったことがありました。当方のミスはミスとしてお詫びしなければならぬわけですが、何度も先方とやり取りをし、自民党本部にも謝罪に行くということになりました。私どものミスですからそれはあたりまえのことなのですが、その経緯が一つ一つ安倍さんのフェイスブックに掲載されました。選挙の前ですから、そうしたことのすべてが票に結び付くということもあると思いますが、大変細かく注意されているなという印象を持ちました。

また選挙期間中に夜の番組で党首討論を計画し、TBSにおいていただく機会がありました。その折には放送前の待機

時間に「きょうは選挙運動の一環で来ました」と言われ、具体的に野党の候補者の名前を挙げて、今日はこれらの政治家について指摘すべきことは指摘する、そうすれば選挙に有利に働くから、などとお話になりました。さて、どうだろうか、と若干心配になりましたが、本番では政府の責任者の失言問題を取り上げるにとどまりましたが、気合が入っているなあ、と思った次第です。

もうひとつありました。私が「ニュース23クロス」という番組に出たときに、安倍総理の憲法改正に対する姿勢について、「参議院選挙まではあまり表に出さずにいこう」ということを言い、その時に「猫をかぶって」という言葉を使いました。これが安倍総理の周辺や支持者の方から「失礼ではないか」と指摘されたと聞いています。

「猫かぶり」というのは広辞苑で調べると「本性を包み隠して、おとなしうに見せかけること」とあります。安倍総理といういわば「権力者」が何を考えているのかを見てとり、視聴者・有権者にわかりやすく伝えることが政治記者の本務ですから、参議院選挙までの総理周辺の動きや方針を伝える言葉として、私自身は「失礼な表現」だとは思ってはいま

せん。ただ事務所なども含めて多くの安倍支持者が非常に細かく報道ぶりを見ています。同時に総理のかじ取りを心配な思いで見ている国民もいる。

私たちも改めて気を引き締めて、伝えるべきことはありのままに伝えるという姿勢を肝に銘じていかなければいけないと思っています。

ですが、さすがに政権を担ってからは、逆に慎重かつ大胆な様子が印象的です。自民党の公約にありました「尖閣諸島への公務員駐在」や「竹島の日」の政府主催記念式典開催などは今のところ時期を明確にしない、つまり一歩後退という現実的な路線に転換されました。

実はつい昨日（1月10日）のことですが、私自身が民放の政治部長会に呼ばれて、半ば糾弾集会のようなことになりました。実は総理大臣と内閣記者会との間では、これまで単独のインタビュアーは申し込まない、受けないという不文律がございました。総理インタビュアーはNHK、新聞、民放、新聞、NHK……というふうな持ち回りの「護送船団方式」で進められてきました。安倍総理はどうもその方式を崩したいと思っていたようでしたので、どうせこの政権が崩れていくルールならTBSが先陣を切ろうということ



高村副総裁



細田幹事長代行

で、去年の12月30日に私たちが先頭を切ってこのルールを破りました。

インタビュはこの日の「報道の日」という番組の中で放送されましたが、官邸内の総理大臣応接室で行われた初のインタビューとなりました。インターネットで総理自身が情報を発信する時代ですから、もはや護送船団方式を続けること

自体がおかしいという判断でした。

もちろん昨日の会合ではTBSに厳しい指摘もありましたが、もはや元に戻ることはない、という認識で政治部長会は終了しました。これも安倍総理が内閣記者会との関係を破棄しても、この際発信の新しい方向性を見つけようということだと思えます。

そういう意味でも、この政権は従来の慣例にとらわれない、ある意味での「必死さ」を見てとることができます。安倍総理は自民党時代からネット発信について力を入れてきました。その自民党での責任者のひとりが高村総務大臣になった新藤義孝議員です。総務大臣といえば選挙をつかさどる総務省のトップですから、参議院選挙に間に合うかどうかはわかりませんが、選挙運動でのネット解禁というのも種々の問題点を抱えているとはいえ、そう遠くない感じがいたします。

### 人事のポイント

さて話題を人事に移したいと思えます。前回は「お友達内閣」と言われた安倍政権ですが、今度は違うかといえ、そうでもない感じもします。お友達というか仲のいいお知り合いというか。しかし、

あえていえば意地悪な部分も見えている人事だと思えます。まず党人事ですが、これははっきり言えばポスト安倍の一番手に付けている石破茂幹事長の力を削ぐ、

包囲網のような人事だといっているでしょう。石破さんが信頼している議員は鴨下一郎、浜田靖一、小池百合子のお三方ですが、この中で周囲に残ったのは国対委員長になった鴨下さんだけです。小池さんは三役の話が流れ、広報本部長の三役並みへの格上げもなされなかった。浜田さんも人事的には外れました。

その一方で幹事長の上には高村正彦副総裁がいて、石破さんの頭を押さえ、幹事長代行には安倍さんとの信頼関係が厚い細田博之さんを総務会長からあえて格下げして、幹事長代行として石破さんの下につけた。

いわば上下から抑え込んでいるわけです。石破さんが一番避けたかった高市早苗さんを政調会長にして、そういう意味では非常に意地悪な人事です。

安倍さんの思惑違いといえ、本来は当選2回ながらも官房副長官に抜擢されたかった小泉進次郎さんが青年局長留任を希望し、安倍さんの手から漏れた。もう一人入閣を固めていた小淵優子さんも自ら固辞して財務副大臣に回った。いずれ

も安倍さんに取り込まれるのを嫌って回避しました。この辺りは総理にとっては誤算でしょうか。

閣僚人事のほうはどうか。安倍さんがどうしてもやりたいものの1つが憲法改正であることはもはやご存じのとおりです。当面は改正要件の緩和、つまり憲法96条の改定ですが、これにすら反対の姿勢を取っているのが古賀誠一元幹事長が君臨していた宏池会です。いまの岸田派ですね。安倍政権が改憲に進めば、当然党内の批判がここから上がってくる。

普通こうした敵対派閥に圧力を加える方法といえば、人事で干すわけですが、今回は逆の手法をとっている。まず会長の岸田文雄さんを外務大臣として取り込



小泉進次郎氏

み、党内ではリベラルとして知られ、尖閣諸島への公務員常駐と竹島の日の政府式典化を公約に盛り込むことを反対した小野寺五典さんを、尖閣防衛の主管大臣たる防衛大臣に据えた。さらに総裁選のライバルであり、宏池会の中ではやや浮いている林芳正さんを農水大臣にあてた。閣内にいわば人質のような形で取り込んだわけです。

岸田さんは外務大臣としては未知数なだけに、外交は官邸主導になる可能性が高い。この3人は非常に難しいポジションに送り込まれたわけです。そのほかにもライバルだった石原伸晃前幹事長ですが、総裁選挙の時に福島第一原発について「サティアン」と呼ぶ失言がありました。この方を原発被害の対応を所管する環境大臣に据えた。こうした点もある意味よく考えた意地の悪い人事といえるかもしれません。ことほど左様に今回の人事は見えていくとはなかなか奥が深い。

### 周辺の人びと

では総理周辺の人事はどうでしょうか。現在、総理の周辺は、経済産業省の面々が固めているという印象です。経済産業省の皆さんは、私の感じで言えば、財務

省と比べて明るく現実的、そして多少イケケどん的な方が多い。いわば財政規律を度外視しても景気回復をなさなければならぬ安倍政権の使命がそこからも垣間見えるわけですが、そうした方々の感覚がスタート時の安倍政権の振る舞いにも見えてくる感じがします。

秘書官には筆頭職にあたる政務秘書官というポジションがあります。自民党政権の場合、通常ですと個人事務所で長く勤めあげたベテラン秘書が就くことが多いのですが、今回は経済産業省で資源エネルギー庁の次長をやってこられた今井尚哉さんという方が就任した。先ほど述べた公共投資を主体とする、ある意味財政規律をかなぐり捨てた。前例のない経済対策をとるための布陣でしょう。

さらには内閣参与というポジションに外務事務次官まで務めた谷内正太郎さんを持つてきました。谷内さんは外務次官を終えた後、たしか毎日新聞で北方領土問題の解決のため3・5島返還論を唱えた人物です。その後、批判を受けて修正されたようですが、そもそも次官時代からたびたびモスクワに赴いて、日ロ関係の現状打破に熱心でした。

この3・5島返還論というのは皆様ご存じですが、面積等分論といわれる

解決方法のことです。歯舞、色丹、国後の3島に択捉島の4分の1を加えるところよ、うど北方領土の半分の面積になる。これを返還させるといふ考え方ですが、そもそもこの面積等分論は、プーチン大統領が中国との間で国境紛争となっていた黒竜江のウスリー島を面積で半分ずつに分けて、痛み分けの形で解決した現実的な路線です。

一昨日(9日)、森喜朗前総理はBSフジの番組で、3・5島ではなく、歯舞・色丹に加えて国後島の返還で決着する3島返還の考えを明らかにしました。プーチン大統領は歯舞・色丹の返還を認めた1956年の日ソ共同宣言を法的に有効な文書としているだけに、2島返還が出发点です。これだけでもロシアの国内世論を考えれば大変な譲歩です。民主党政権下でメドベージェフ大統領が国後島を訪問しました。日本はこれに猛反発しましたが、見方を変えればロシア側は一貫して歯舞・色丹では日本に刺激的な対応をしていない。プーチン政権下では2島返還は常に用意されているとみるべきで、ここが出发点ととらえるべきだという冷静な分析もあります。

日本政府の原則はあくまでも4島返還ですが、3・5島が現実的な案とする



北方4島

「谷内案」からすれば、さらに一步日本が譲歩する形となる森氏の3島返還論は、現実的な選択肢の1つと受け取ることもできます。森氏は2月20日に訪ロしますが、こうした流れを見ていくと日ロ関係は極めて現実的な方向に踏み込んでいく予感がしています。

谷内さんの話が長くなりましたが、そのほかの内閣参与についても意味深なところがあります。まず小泉総理の秘書官だった飯島勲さん。これは党に残ってし

まった小泉進次郎さんへの布石ということができます。パイプということでしょうか。もう1つ有権者に向けたPRの顧問役ということもあるでしょう。小泉政権といえば就任早々にハンセン病訴訟の控訴断念を打ち出して世論を引き込んだことが記憶にあります。当時、これには飯島氏の考えも反映されていると伝えられました。

もう1人、財務事務次官経験者の丹呉泰健さんは主計官時代に厚生労働省を担当し、介護保険制度を導入したことも知られています。社会保障の再構築は前政権以来の主要課題ですから財務省へのらみと同時に厚生労働省へも働きかけができる丹呉さんの抜擢も工夫された人事といえます。こうしてみると、たんに「お友達内閣」といわれた前回よりも人事については格段に考え抜かれているといえます。

あと1人触れておかねばなりません。麻生太郎副総理兼財務大臣です。安倍さんが総裁選挙に出て勝ったのは、この人の支援抜きにはあり得なかったと思います。最有力視されていた石原幹事長を「平成の明智光秀」と呼んで、安倍さん支持を打ち出した。安倍さんからすれば功労者の1人です。



麻生副総理

ただ今回の人事では麻生氏はいろいろと自分の考えを押し出して、必ずしも安倍総理周辺とはうまくいかなかったという話もあります。これは私のうがった見方かも知れませんが、安倍総理のあと、ポスト安倍を狙っているのは案外この人も知れません。安倍さんに2度目があって、なんで私に2度目がいいのか、というわけです。まあ、自民党内の世論というわけではなく、漫談の域を出ないところではありますが、案外ご本人はそう思っているのではないかと考えています。

### 当面の政治課題

では当面の政治課題の流れについてお話しいたします。

まず国会ですが、通常国会の召集は1

月の下旬、28日になります。今日11日に緊急経済対策が決定され、補正予算の編成が進んでいます。28日からの国会ではまずこの補正予算案の審議が行われ、2月の上旬には成立するでしょう。そのあとに来年度の本予算が出てくるのは2月の下旬ということになります。2週間ほどの空白が生まれることとなります。本予算が成立するのは5月の連休前後になるのでしょうか。

通常国会は150日間が本来の会期ですが、安倍政権の方針としてこの国会では与野党の対立を招くような政策課題、重要法案は国会に提出しないことになっているようです。したがって、与野党対決という局面は起きにくい、野党としてはまことに見せ場のない国会になるかもしれません。そうなると会期の延長もなく、公職選挙法に則れば7月21日が参議院選挙の投票日ということになります。では2月の中旬ごろと、来年度予算が成立したあとの5月、6月には何が行われるのか。2つの課題がここで処理されることになるでしょう。

1つは各種の審議会、懇談会、協議会、まあ名称はいろいろでしょうがいわゆる有識者による懇談会のようなものです。

前の安倍政権、自民党政権時代から復

活したものとして①教育再生実行会議②国家安全保障に関する官邸機能強化会議③安全保障の法的基盤の再構築に関する懇談会④経済財政諮問会議があり、さらに新設するものとして⑤歴史認識を巡る首相談話に関する会議⑥日本経済再生本部の下に「産業競争力会議」⑦規制改革会議などです。平たく言えば経済関連を除いても、①は教科書問題の近隣諸国条項（歴史記述に当たっては近隣諸国に特に配慮すること）の見直し②は日本版NSCの創設③は集団的自衛権の憲法解釈の変更⑤は従軍慰安婦についての「河野談話」に代わる安倍談話を出すこと是非などが話し合われる、いわば安倍さんの本当にやりたいことがすべてこの懇談会などに関わっています。

審議会政治といえれば思い出すのは中曽根康弘総理時代の政権運営です。中曽根さんは若干党内基盤が弱かっただけに、党内の情勢に左右されない形で官邸主導の政治を目指しました。そこで多用されたのが「審議会政治」だったわけです。この手法をとれば党の部会や調査会に縛られることなく、自らの諮問機関の結論を持って政策遂行に進むことができます。つまり党の力を弱めて、自らに権力を集中させることが可能になる。さらには有

識者の結論を国民的な議論を行ったということにすり替える、ということができません。

当時もこうした審議会政治には批判があったのですが、安倍政権がこうした手法をどこまで用いてくるのか。こうした審議会は1月から2月に立ちあがり、通常ですと連休明け頃には中間答申という形で方向性が見えてきます。これらの答申が参議院選挙の争点、参議院選挙をどう考えるかというメルクマールになりま

すし、参議院選挙を終えれば当然のごとく安倍政権の目指す重要政策課題に浮上してきます。

秋の臨時国会ではこれらの答申が法案化の道に入ってきます。特に③の集団的自衛権の憲法解釈の変更は、単に総理の談話や内閣法制局長官の答弁では済まされない問題でしょう。国家安全保障基本法の制定というのが秋には現実問題として出てきます。これは北朝鮮の弾道ミサイルを日本が打ち落とすか、ということや、日米共同訓練中に米国艦船などが攻撃を受けた時に自衛隊の護衛艦がともに反撃することができるとか、などといった極めて現実的な問題をはらんでいます。安倍政権はこの具体的な行動を4類型に分けて例示していますが、これらが現実



少女像（従軍慰安婦像）ソウル

に発動できるようにするという問題が今後出てくるでしょう。

経済で言えば、昨日今日の動きの中で「3本の矢」という言葉が出てきました。①大胆な金融緩和②機動的な財政出動③成長戦略の3つです。①については、すでに日銀に相当の圧力がかかりながら進んでいますし、②についても事業規模20兆円という公共投資を柱とする案が出されます。

心配なのはそれらに見合う成長戦略がどこまで具体化するかということです。ちょっと前までは「自民党の成長戦略って国土強靱化？」などと首をかしげる向きもありました。iPS細胞研究に資金

が投じられるなどの動きが出てきていますが、今後どのような形で民間も含めて成長産業が創出されていくのかを、見ていかなければなりません。

2つめの課題としては、同時にですがこうした国会審議の「空白」の時間帯は外交が進む時期でもあります。安倍首相は1月16日からベトナム、タイ、インドネシアを歴訪しますし、2月にはアメリカ訪問を実現しようと模索しているところです。韓国との間では2月25日の朴槿恵大統領の就任式に出席する意向のようですので、現実的な対応が図られると期待します。

中国についてはまだ緊張した状態が続いていますから、2段階での中国包囲網が構築されつつあるとわかっていいのではないのでしょうか。1つは中国を取り巻く東南アジア各国との認識を共有しつつ、そのうえでもう1つ日米同盟の深化と日ロの新しい関係を作り上げていく。ロシアと言えば中国は非常に仲のいい同盟国ということになっていますが、同時に極東・シベリアの安全保障ということを考えると、中ロはお互い最大の仮想敵国でもある。ロシアが日本とのさらなる関係改善を求めてくるのも、こうした世界戦略あつてのことだと考えます。

一方でアメリカは安倍政権がよりタカ派的になっていくことには警戒感が強いでしょうし、そのことで日中関係が不安定になるのは、アメリカの東アジア戦略上も好ましいことではありません。が、同時に安倍政権が進める集団的自衛権の憲法解釈変更が進めば、アメリカ自身のアジアへの軍事力の展開に決してマイナスではありませんし、あるいは沖縄の基地問題に何らかの影響をもたらすかも知れません。

安倍総理が日米首脳会談を急ぐのも、こうした共通認識を少なくとも朴大統領就任式典出席までに日米ですり合わせておきたいという狙いがあるからなのだと思います。

### 参議院選挙に向けて

さて最後になりますが、参議院選挙について触れておきたいと思います。今のままの国会日程でいけば7月21日が選挙ということになります。今日（11日）安倍さんは大阪まで行って橋下徹大阪市長、日本維新の会代表代行に会いに行っています。石原慎太郎代表ではなく、橋下さんというところがなかなか意味が深いと思います。ここでは政策的な協力を求めていることと思います。



惨敗した2007年参院選、右は中川幹事長（当時）

自民党が参議院選挙で勝つとすれば、ここで勝つという意味には過半数の確保と、3分の2の確保というのがあると思いますが、いずれにしても29ある小選挙区で圧勝しなければなりません。

逆に野党が自民党に勝つためには少なくともこの1人区で野党協力が成立し、一対一の対決の構図を作り上げることが必要ですが、今の政治の動きをみると、とてもそうした構図が作れそうな雰囲気はありません。

民主、維新、みんなが手を結ばなければ

ばいけないわけですが、民主がそうした共通体制を作る前に、維新とみんなが共通候補を作るための政治塾の立ち上げに進んでいます。そして安倍総理の協力要請の動きを見ていると、一方の民主党はおっとりしすぎていないだろうか、と心配になります。もっとも維新の会とは別に、今は連立を組んでいる公明党内では、憲法改正も含めて自民党の動きに対するストッパーとしての役割に期待をかける方も多い。公明党自身は政権に参画しながらも非常に難しいかじ取りを迫られることになったといえるでしょう。

もう1つ、気になっているのが、選挙制度改革の話です。衆議院の定数削減も含めた制度改革はこの通常国会で処理することになっています。しかし公明党は単純な定数削減については反対でしょうし、維新の会の削減幅と自民党などの考えは大きく隔たりがあります。これをどのようにまとめていくのか、難しいところだと思います。

また今の衆議院の勢力は最高裁で「違憲状態」とされたままでの選挙の結果です。いずれ裁判所でなんらかの判断が出されると思いますが、再び違憲状態という判断が出されたときに、どこまで解散せずに引っ張っていけるか。もちろんそ



の時の内閣の支持の状況に左右されるでしょうが、300議席近くを確保したとはいえ、そのままの状況で衆議院の任期満了まで行けるかといえ、そう簡単ではないと思います。

そして今回の緊急経済対策が結果を出せなければ、厳しい有権者の目が注ぐこととなります。個人的には景気が回復して欲しいのはやまやまですが、経済界の方の話を聞いても「楽観的」な見通しを語る方は少ないし、正直な話、出てくるのは、やってみなければわからない、という言葉です。

参議院選挙の後、おいどうなっているんだ、話が違わないか、ということにもなりかねません。また機会がございましたらお話しできる場を頂ければと思います。本日はありがとうございます。

(以下、一問一答要旨)

**問** 安倍さんの次の総理は麻生さんか、という話がありました、石破幹事長のほうがいいのではないですか。

**答** 麻生さんになるだろうということではなくて、本人がなりたいと思っっているのではないかと、ということ。現実的には確かに石破氏のほうが可能性は高い。ただ石破氏は党員には人気がありますが、

議員連中にはあまり人気がない。そこでもう引退しましたが、古賀派の会長だった古賀元幹事長に言わせれば、「ポスト安倍の候補者はいない」ということになります。これという候補者はまだいないというのが本当のところでしょう。

**問** 石破さんの話は論理的ですが、上から論すようなものの言い方が私は好きではありません。党員に人気があるのはなぜですか。

**答** やはり一般の党員の身近にこまめに足を運んだのが大きいと思います。石破さんは政調会長時代から全国を歩いています。その点は安倍さんや石原前幹事長よりも上です。

身近に接触するという意味では、鈴木宗男さんの例があります。あの人がなぜ一時大きな力を持ったかですが、亡くなった同期の中川昭一さんと一緒に政務次官になるとき、2人とも北海道の農村が地盤ですから、農水省を希望した。しかし、鈴木さんは中川さんに農水を譲り、自分には人気のない防衛次官に回った。そこで鈴木さんがなにをしたかですが、全国の部隊を回って、隊員と接触し、行った先々にカラオケセットを置いてきた。隊員たちは毎晩「鈴木宗男先生寄贈」と書かれたカラオケセットで歌を歌うわけです。それ

から基地にはいろいろな業者が出入りします。とくに食品関係の業者さんなどがこの人たちを組織して、鈴木宗男後援会を作って、力をつけていったんです。末端で身近に接触することが政治家にとって大事なことを示す例だと思います。

ただ議員たちとなると、石破さんに高い目線からものを言われるとウザい。「なんで石破に説教されなければならなんだ」、ということになります。難しいところでは。

**問** 安倍さんの歴史認識は70年くらい昔の時代に戻ってしまったのではないかと気がします。アメリカにとって、そういう安倍さんの存在はどうなんでしょう。アメリカは中国と経済的に強く結びついていきます。安倍さんには好感を持っていないのではないですか。

**答** アメリカは安倍さんの考え方には受け入れられないところがあると、警戒していると思います。しかし同時に、安倍さんに期待していることもあります。日米同盟の再構築です。沖縄の基地の扱いや同盟の負担の面で安倍さんがより多くを引き受けてくれるとなれば悪くない。大事なのはアメリカの国防戦略ですから。その上で中国とのバランスを崩されては困るということではないでしょうか。

**問** 安倍さんは内閣を組織して、最初の外遊先としてアメリカに行きたかった。しかし、「忙しい」という理由で断られてしまった。それには安倍さんが従軍慰安婦についての1993年の河野洋平官房長官談話のうち、慰安婦募集に軍の強制があったと認めた部分を修正しようとしている点が、ニューヨークタイムズに批判されたように、安倍さんの歴史認識をアメリカ政府も問題視していることが関わっているのではないか、という見方があります。そのため、新年早々、河相周夫外務次官が急遽ワシントンに飛び、中旬にはキャンベル国務次官補がやってくるのではないか、というわけですが、官邸の雰囲気はどうですか。

**問** 訪米については、安倍さんは当初、昨年暮れの特別国会前にも行きたかった。しかし、クリスマスも近いということでも断られた。そして、今度は1月中旬に行こうとしたが、また断られた。ただ、その理由としては総理周辺では、アメリカは今のところTPP（環太平洋経済連携協定）について、明確な態度を安倍さんから聞くことはできないだろうということではないかと見ている。

**問** アメリカでは従軍慰安婦の問題は非常に重要視されている、と聞いています。

それについて官邸ではどの程度認識しているのでしょうか。下手をすると、せっかく韓国とよりを戻そうとしても、逆にこの問題で韓国、中国、アメリカ3国による安倍包囲網ができてしまう事態さえ考えられると思うが。

**答** 従軍慰安婦の問題は重要視しています。河野談話を変えようというわけですが、逆に周辺にも「それだけは絶対にやっではだめだ」という声もあって、どうするかは難しいところです。ただ安倍さんとしては、韓国へ行く前にアメリカとこの問題で認識を統一したい。その上で韓国へ行きたいと考えているようです。朴槿恵新大統領の就任式には2月25日ですから、24日には韓国へ行きたい。それまでにはオバマ大統領と会談したいというのが、今の官邸の予定表だろうと思います。

**問** 安倍内閣は発足早々、緊急経済対策を打ち出しました。機動的な財政政策、成長戦略より上に「大胆な金融政策」を掲げて、日銀にもっと大胆に金融を緩和するようにと迫っていますが、この政策は効果的に成果を上げるのでしょうか。その可能性はどの程度のものでしょうか。

**答** その質問は安倍さんに聞いても答えられないのではないのでしょうか。「やってみなければわからない」と。私にも答

えられません。経団連の副会長さんと話す機会がありました。その人も成功するか、失敗に終わるか、予想はしませんでした。しかし、楽観はしていませんでした。日本経済がよくなってほしいと思うのは当然だが、安倍さんが言うほど事は簡単ではない、という態度でした。場合によっては、安倍政権はそんなに長くはないのではないか、自民党政権は続くにしても、というニュアンスでした。まあ、今の経団連の米倉弘昌会長と安倍さんとはいろいろ行き違いもあったようです。たとえば、歴史認識について、米倉さんが「外国ではいろいろ言っているようですが」と言うと、安倍さんはすぐさま「それはどこの国ですか、言ってください」と切り返すといったふうで、経済対策を含めて「あれではね」といった感じのようです。

(1月11日・公開フォーラム)

講師略歴(りゅうざき たかし)

1960年 神奈川県生まれ

1984年 横浜国立大学卒業 毎日

新聞社入社

1995年 TBS入社

報道局政治部、モスクワ支局長などを  
経て、現在、政治部長